

日本グループ・ダイナミクス学会会報

ぐるだいい

JGDA
ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 44 号

(2013年10月31日)

発行所：〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学人文社会系研究科 社会心理学研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：唐沢かおり 編集担当：北村英哉

【目次】

§日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会後記……………	2
★大会準備委員長から：今川民雄	
§大会参加記……………	3
尾関 美喜	
§優秀論文賞……………	4
★説明：沼崎 誠	
★受賞者の声：渡辺 匠／内田由紀子	
§優秀学会発表賞……………	7
★説明：戸梶亜紀彦	
★受賞者の声：菊地 梓／寺口 司／Gen ITO／白岩祐子	
§三隅賞……………	11
§海外(AASP)派遣……………	12
★参加者の報告：山田順子／河合直樹／古村健太郎	
§機関誌編集委員会からのお知らせ……………	15
§事務局からのお知らせとお願い……………	15
★研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について	
★実験社会心理学研究 掲載予定論文	
★実験社会心理学研究の特集テーマ募集	
★次年度大会について	
§グルダイ学会関係連絡先……………	17

★日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会後記★

大会準備委員長 今川民雄（北星学園大学）



日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会は、7 月 14 日、15 日の二日間にわたり、札幌の北星学園大学で開催いたしました。北海道では初のグループ・ダイナミックス学会の開催ということもあり、参加の皆様にご満足いただける大会にしようと準備委員一同、開催に取り組んできましたが、大会を終え、決算も終わり今はほっとしているところです。これは何度も皆様にお伝えしたことで

すが、大会発表申し込み開始当初は、発表数がなかなか増えず、申込事務を担当された中西印刷様にはご迷惑をおかけしつつ、二度にわたり締め切りを延長しました。準備委員会でも心配し通してでしたが、学会員の皆様のご協力を得ることができ、おかげさまで最終的には 92 件の発表、4 件のワークショップと多数の申し込みをいただくことができ、また、最終的に 170 名の方に参加いただき、何とか大会の体裁を整えることが出来ました。

大会当日も幸いにして好天に恵まれ、札幌在住の私たちにとっては暑いと感じる天候でしたが、本州から来られた会員の皆さんにとっては過ごしやすい気候を経験していただけたことも、幸いでした。会員の皆様の移動の効率を考慮し、大会会場を一つのフロアに集中して展開できたことは、良かったと思っておりますが、大会初日のポスター発表の部屋に冷房装置がなく、予想外に大変蒸し暑い状態になってしまいました。一つには会員の皆様が多く集まってくださり、熱いやり取りを繰り返されたことがあったと思います。しかし、そもそも本学では南側の教室のみに冷房が入るようになっており、ポスター発表会場が北向きの部屋だったため、発表者及び参加者の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。幸い翌日は、朝から窓を開放したこともあってさほど暑くならず済みホッとしました。

懇親会も大変にぎわいました。これは写真を掲載しておりますが、100 名以上の参加を得て、時間いっぱい話に花が咲きました。私の個人的な好みではありましたが、北海道産の日本酒とワインのみを、それぞれ 10 種類ほど用意させていただきました。いずれもすべて品切れとなり、それなりのご好評をいただいたものと喜んでおります。





本題であります学会発表も、写真にもありますように、口頭発表でもポスター発表でも、参加された皆さんの熱心な討議が時間ぎりぎりまで展開されておりました。また唯一のシンポジウムでは、大雑把なテーマの提供であったにもかかわらず、唐沢会長をはじめ大坊先生、山口前会長、結城先生が、それぞれに濃密な内容の提言をくださり、充実した時間を持てたことを感謝いたします。

参加して下さった皆さん、発表して下さった皆さん、本当にありがとうございました。そして、

何人もの参加された方々から、そのホスピタリティにお褒めをいただいた、本学の学生諸君に感謝します。

★第 60 回大会体験記★

尾関美喜（早稲田大学人間科学学術院）

13th European Congress of Psychology（ストックホルム）で発表し、成田からそのまま北海道に着いた翌日、大会初日午前の口頭発表セッション1「集団過程」のトップバッターで発表させていただきました。今回は2学会連続で集団アイデンティティ研究にマルチレベル分析ならではの発想を適用した研究発表をしたこともあり、グルダイならではの良さがよりはっきりと感じられた大会でした。

まず、同じ分野を専門とする研究者同士で密な議論ができ、発表者と参加者の距離が近いというのは、個人的には、グルダイの最大の良さだと思います。今回も、全体討論の時間や懇親会でも、他大学の先生方から今後につながるコメントをいただくことができました。また、並行セッションの数が少なく、近接分野の発表がバッティングしないようにプログラムが組まれているのもありがたいです。

シンポジウム「グループ・ダイナミクス：その成果とこれからの課題」では、社会的認知、対人コミュニケーション、集団、文化の4つの分野について、各分野のこれまでと現在抱えている課題を、各分野を代表される先生方のお話を伺うことができました。個人を対象にデータを収集し、各種統計分析を用いて仮説を検討し、モデルや理論を構築するという方法論を基本的にとることに伴う限界、技術の発達が可能にする新たな測定手法を一度に聞くことで、社会心理学がどこからきて、どこに向かうのかを見つめる、良い機会になりました。

そうした流れの最後に、若手研究者には、結城雅樹先生から「課題」が出されました。課題の内容をまとめてしまうと、「自分の研究で扱っている内容を正しく理解すること、自分が理論を作るくらいのつもりで研究すること、それを発信していくこと」といったもの

です。現役若手研究者の1人である私は、この課題に向き合うようにといわれる側にいます。その立場にある身としては、「このまま今のスタンスでいっても、そんなに間違っていないみたいだし、いけるな」と、個人的には思いました。同時に、これは研究者である限り永遠に取り組まないとならない課題でもあり、この課題に全ての研究者が真摯に向き合いながら研究を進めることが、社会心理学の未来を創っていくのだろうとも思いました。

発表セッションとシンポジウムを含めて考えると、今回の大会は、個々人が研究を進めるためだけではなく、社会心理学が未来に向かっていくための道と課題が示された大会だったという印象を持っています。時差ぼけで発表時から懇親会まで吐き気が続くという状態での参加になってしまいましたが、研究をしていくうえでの姿勢や方向性を改めて考えさせられたという点で、強行軍でも参加してよかった、と思える大会でした。

★優秀論文賞★

優秀論文賞の選考経過と結果の報告

機関誌編集担当常任理事 沼崎 誠（首都大学東京）

本年度の優秀論文賞の選考対象論文は、実験社会心理学研究第52巻1号及び2号に掲載された原著論文9本・資料論文3本から、すでに第1著者が受賞経験をお持ちの1本を除いた、計11編でした。4月23日に編集委員全員に選考依頼を行い、優秀と考えられる論文3編を選び、1位から3位まで順位をつけて、6月28日を締め切りとして投票をお願いしました。22名の編集委員から投票が届き、規程に従って、1位票に3点、2位票に2点、3位票に1点を与えて集計しました。その結果を参考資料として、7月13日に優秀論文選考委員会を開催して協議した結果、以下の2論文に今年度の本学会優秀論文賞を授与することを決定しました。

- WATANABE Takumi & KARASAWA Kaori Self-ingroup overlap in the face of mortality salience. (第52巻1号 pp.25-34.)

(日本語表記：渡辺匠・唐沢かおり 死の顕現性が自己と内集団の概念連合に与える影響)

- 内田由紀子・遠藤由美・柴内康文（著）

「人間関係のスタイルと幸福感：つきあいの数と質からの検討」

(第52巻1号 pp.63-75.)

なお、大会の総会において、この結果を報告し、授賞式を行いました。受賞者の先生方の、益々のご研究のご発展をお祈り申し上げます。

【受賞者の声】

🌸 渡辺 匠（東京大学大学院人文社会系研究科）



この度は優秀論文賞という名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。本論文は修士課程のときに実施した研究をまとめたものであり、実験実施から報告にいたるすべての過程において、指導教員である唐沢かおり先生や大高瑞郁さん、白岩祐子さん、橋本剛明さんの先輩方に多大なご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。また、投稿論文の審査で有益なご指摘をいただいた査読者の先生方、論文賞の審査にかかわってくださった先生方、実験参加者の方々に感謝いたします。前日入りにもかかわらず、当日の総会に遅れてしまったのですが（関係者の先生方、申し訳ございませんでした）、

携帯メール・着信履歴が多数あり、戦々恐々としながら会場入りしたのを覚えています。総会直後に駆け寄るかおり先生の右手が動いたまさにそのとき、「右フックが飛んでくる！」と感じて咄嗟に身をかがめたのが今となっては思い出の一つです（実際は頭をなでてもらい、右フックが飛んできたことはもちろんございません）。

当日の学会では、総会直後のシンポジウムの内容・議論も強く印象に残っています。特に、「若手はもっと新しい研究をして、英語で国際的に勝負しなければならない！」という結城先生のお話は胸に刺さりました。この研究を実施した当時は英語論文を書く気概があったのですが、最近はさまざまな理由ですっかりその気概が薄れていました…。本論文の受賞理由の少なくとも一部は、「英語で書いてがんばったね！」という努力賞だと感じているので、今回を機に自分の考えを改めたいと思います（また、愛弟子の櫻井くんからも、「何で英語論文書かないんですか？」と月に1回くらい問い詰められるため…）。

ところで、本論文では、死の顕現性という人間にとって根源的な恐怖に対する防衛方略を検討しております。一方で、最近では、自由意志という人間の行為選択にかかわる問題に関して、実証的な観点から分析をしています。死の顕現性と自由意志という2つの研究テーマは相違点多々ありますが、どちらも人間の存在そのものや人間らしさについて問いを立てる魅力的なテーマであると感じています。これらの人間性に関する問題について今後も継続的に検討し、その際にはみなさまより引き続きご指導いただけますと幸いです。あらためまして、この度はありがとうございました。

🌸 内田由紀子（京都大学）

内田由紀子（京都大学）・遠藤由美（関西大学）・柴内康文（東京経済大学）

このたびは榮譽ある賞を頂き、大変嬉しく光栄です。まずはお世話になりました編集委員、選考委員、査読者の先生方、そしてデータ収集にご協力をくださった方々、コメントをくださった方々に心よりの感謝を申し上げたいと思います。



この研究は、「ソーシャル・キャピタル」研究などに代表されるように「人との繋がり」の効果について取りあげられることが多い中、「幸福に資する人との繋がりとはどのようなものなのか？」という未だ明確ではない問題に取り組んだものです。研究をスタートさせたのはもう7年前にもなる2006年でした。当時関西圏にいた共著者3名が、関西大学での科学研究費の支援を受けてグループを形成、時には泊まり込みで

のデータ分析大会を行うなどして、様々な角度から議論や分析を行いました。身近な人間関係に焦点をあてた研究1の結果は、「つきあいの数よりも、やはり一緒にいて居心地がいいと思えるような『質』のほうが大事」というものでした。つまり「友達100人」よりも「一人でもいいから、親友を」というわけです。これはなるほどと納得できる結果である一方で、現在SNSの利用などで人間関係が拡大する中、つきあいの数は本当に幸福に関係ないのだろうか？それではなぜ多くの人とつながりを持つとするのか？という疑問が生じます。また、広がったつきあいを「幸福に資する」ものとするかどうかには、個人差が存在するのではないかと考えました。このことから、身近な関係だけではなく様々なつきあいまでを範囲に広げた研究2を実施しました。結果は予想通り「つきあいの数と質の両方が大切」となりました。さらには人間関係を広く求める「開放型」の人では「つきあう人の数が多いこと」が、既存の安定的な人間関係を維持しようとする「維持型」の人では「つきあいの質」が、それぞれ幸福と関わっていることも示されました。つまり「友達100人」や「いろいろな人とつながろう」ということのメリットは、開放型の人には当てはまるけれど、維持型の人にとってはむしろ関係性を広げるリスクも存在しているということです。ちなみに今回のサンプル（日本人大学生641名）において開放型と維持型は6対4ぐらいの割合になっていて、これも個人的には興味深い結果でした。

(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjesp/52/1/52_63/article-char/ja/)

なかなかおもしろい結果になった、と自画自賛していた研究だったのですが、いざ論文にするとみると、かなりの「難産」となりました。第1項を提出してからほどなくして第1著者である筆者が妊娠。臨月近くなったころ初稿への査読をいただいたのですが、かなり多くの問題点を鋭くご指摘いただいております、理論的なことから練り直す必要がありました。しかし当時筆者は切迫早産で自宅安静となっており、机に向かって執筆をすることができない状態にありました。その際編集委員の先生には改稿期限を延長して頂くというご配慮をいただき、心より感謝しています。こちらの出産は幸い「安産」だったのですが、出産後ほどなくして乳児を抱えながらの改稿作業には再び心が折れそうになることもありました。第4稿でついに採択となったときには心底「安堵した」という気持ちが強かったです。

このように非常に苦労した論文だったのですが、これらの改稿を重ねた御陰で今回受賞させて頂くことができるものに仕上げることができ、編集委員と査読者の先生方には丁寧

にご高覧頂き、重要なお指摘とお励ましを頂いたことにひたすら感謝しております。この研究を通して多くの方々に助けられ、本当に「人とのつながりは財産だ」と実感することができました。絶え間ないご支援をいただいた皆様、本当に有り難うございました。

(執筆：内田由紀子)

★優秀学会発表賞★

2013 年度 優秀学会発表賞の選考経過と選考結果のご報告

選考委員長 戸梶亜紀彦（東洋大学）

2013年7月14日から15日にかけて北星学園大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第60回大会において、「2013年度優秀学会発表賞」の選考が行われました。本賞は、規程により「第1著者である発表者が、発表時点において大学院在学中の者、または大学院修了後（退学後）5年以内」の会員の研究を奨励する目的で設けられた賞です。

以下に、今回の選考経過の概略ならびに選考結果をご報告いたします。

1. エントリーの受付

エントリー受付は、大会発表申し込みの際になされました。エントリー総数は39件でした。この中に、規定上、第1著者に受賞資格がないものが1件含まれていたため審査対象から除外しました。その結果、第1次審査の対象となった発表総数は38件でした。

2. 第1次審査

第1次審査は、常任理事及び理事により構成された20名の選考委員により行われました。各選考委員は、6月上旬から下旬にかけて、エントリーされた発表の論文集原稿を読み、各部門において授賞に相応しいと思われる発表3本以内（「該当なし」も含む）を選び、投票しました。集計の結果、English Session、ショート・スピーチ、ロング・スピーチ、およびポスター部門のそれぞれにおける得票数の多かった上位3件ずつが選出され、全エントリーを併せた計12件が、当日の第2次審査に進みました。

3. 第2次審査

第2次審査は、第1次審査を通過した12件に対して、大会期間中に行われました。1つの発表に対して3名の選考委員が、「発表内容」と「プレゼンテーション」のそれぞれを5段階で評価しました。

4. 授賞対象発表の決定

最終集計は、第1次審査と第2次審査の結果を合わせて行いました。その結果、部門ごとに最高点を獲得した以下の発表における第1著者の方々が、発表賞を授与されることに決定しました。（なお、今回はある部門において最高点に同点があったため、選考委員会での議論の結果、当日の得点の高い方に決定しました。）

<ロング・スピーチ部門>

- 菊地梓（九州大学） 共同発表者：山口裕幸
想定外の困難に直面した組織の迅速な復旧を支える要因の検討
—宮城県女川町の企業を対象とした調査—

<ショート・スピーチ部門>

- 寺口司（大阪大学） 共同発表者：釘原直樹
ラベルとしての『正義』による攻撃の正当化
—内集団成員と第三者の視点における影響の違い—

<English Session 部門>

- Gen ITO（東京大学） 共同発表者：Shokei TENMA, Yohtaro TAKANO
"Why" reasoning vs. "How" reasoning, which fosters empathy? The differentiation of
imagine-self and imagine-other

<ポスター発表部門>

- 白岩祐子（東京大学） 共同発表者：唐沢かおり
共感しているのになぜ支援しないのか？
—「加害者を赦さない遺族」に対する赦しの効用的価値観の効果—

受賞者は、学会長より賞状を授与されました。また、受賞した発表に関する論文を第1著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を付与されました。すなわち、「特集論文」に準じて、主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は、学会の広報（速報）メールマガジンである「グルダイメールマガジン (JGDA_Flash)」における受賞発表日（2013年7月31日）から1年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は、その旨を明記の上、2014年7月31日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

<ロング・スピーチ部門>

🌸 菊地 梓（九州大学大学院人間環境学府）

この度は優秀学会発表賞という名誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。ご選考いただきました審査員の先生方、また本発表に対してご質問及びご指導いただきました諸先生方に心より感謝申し上げます。

今回、学会発表申し込み期限の直前に学会に入会し、駆け込み発表登録をして、初めて参加させていただきました。慌ただしい入会手続きにも関わらず、ご丁寧にご対応下さいました事務局の方々に改めて感謝申し上げます。初めてのグルダイでしたが、非常に示唆に富む、興味深い研究発表ばかりで、尊敬というよりも、憧れの眼差しで見えておりました。と同時に、しっかりと精進せねばならないと身が引き締まりました。



さて、本発表では、組織が備えるレジリエンスー組織レジリエンスに焦点を当て、組織が想定外の困難な状況に直面し、一時的に機能困難な状況に陥っても、その状況を乗り越えていち早く復旧するためには、どのような要因が影響するのかについて検討した研究成果を発表させていただきました。最近一気に注目されるようになったレジリエンスについて、個人レベルのアプローチのみならず、チームや組織全体に備わるレジリエンスについて捉えていこうとしています。その第一歩として、実際に東日本大震災で甚大な被害を受けながらも迅速な復旧を遂げた組織を対象に調査を実施し、生の声を聞かせて頂きました。今回、非常に貴重なデータを得ることはできましたが、研究としてはまだまだ未熟な限りです。この受賞を励みとし、より一層研究活動に邁進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、いつまでたっても未熟で頼りなく、非常にへこたれやすい私に対して、諦めることなく根気強く、そして温かくご指導くださっている山口裕幸先生、研究室OBの諸先輩方、そして研究室の仲間に、この場を借りまして、改めて心より感謝申し上げます。これからも見捨てないで頂けますと幸いです。

<ショート・スピーチ部門>

🌀 寺口 司 (大阪大学大学院人間科学研究科・日本学術振興会)



この度は、このような名誉ある賞をいただき、誠に光栄に感じております。審査員の先生の皆さま、そして本発表に対してご意見・ご質問いただきました諸先生方に心より感謝を申し上げます。

本発表は「正義」を標榜することをラベリングの一種として捉え、どこまで攻撃行動が正当化されるのかを攻撃を評価する立場（攻撃者の内集団成員、第三者）から検討する実験結果を報告したものでした。第三者は攻撃に関係しない存在であり、攻撃への介入や批判を行うことで攻撃を抑制しうる

存在です。そのような第三者に対して、攻撃者へのポジティブなラベリング (i.e., 正義の標榜) という戦略は攻撃者に対する評価を低コストで変えてしまうという危険性をもっていると考えられます。本実験では、従来検討されてきた被害者へのネガティブなラベリングと比較し、その結果、ネガティブなラベリングでは内集団成員にしか影響がなかったものの、ポジティブなラベリングでは第三者に対しても影響がある可能性が示唆されました。

もちろん、ラベリングの危険性を主張するためにはまだまだ解明すべき点が多く残っております。学会で発表を行うたびに先生方から様々なご意見を頂戴して、「あれもしなければ」、「そうか、その視点もあったか」と目移りしていくほどです。今回の学会でも数多く

のご意見を頂戴しまして、大変嬉しく思うのと同時に、研究の道のりの長さを痛感しております。ですので、今回の受賞を励みに、より一層研究に専念する所存でございます。

本研究は日ごろよりご指導いただいております釘原直樹先生のおかげで実施することができました。そして、様々な示唆を与えてくれる研究室内・外の多くの先輩方、ならびに勢いのある同期・後輩たちに背中を押されて研究を進めることができました。この場を借りて皆さまに厚く御礼申し上げます。

<English Session 部門>

🌸 伊藤 言（東京大学大学院人文社会系研究科）

この度は大変名誉のある賞をいただき、とても嬉しく思います。審査員の先生方、貴重なコメントをくださいました皆様、そして研究を支えてくださった多くの方々（とりわけ天馬少京さんと高野陽太郎先生）に心より感謝申し上げます。



本発表は、解釈の抽象度（解釈レベル）に応じて対人認知、その中でもとりわけ共感がいかに変化するかを明らかにしようと試みたものでした。先行研究では、抽象的な解釈（Why?推論）が共感を促進するという立場と、具体的な解釈（How?推論）が共感を促進するという立場双方が存在していました。それに対し本研究は、解釈の抽象度が共感に影響を与える経路が2つ存在する可能性を指摘し、自己を他者に投影する思考を行う場合は抽象

的解釈が、自己と他者を分離して思考を行う場合は具体的解釈が共感を促進することを（少しだけ）明らかにすることができました。

社会心理学の分野に限らず、心理学では「心の階層性（ヒエラルキー構造）」に関する研究が長い間行われてきました。私は認知心理学畑出身ということもあり、知覚における階層性、概念構造における階層性、記憶における階層性など「心の階層性」に関する研究全般に興味を持ち研究を進めています。その中でもやはり、社会心理学分野における研究プログラムである「解釈レベル理論」には大きな魅力を感じており、解釈の抽象度と心理的距離の認知が連合関係にあるという仮定を置くことによって、認知心理学的なマイクロ・プロセスと社会心理学的なマクロ・プロセスが（私にとって）一本の筋でつながるように思えるのです。とはいえ、社会的認知に対する抽象度（階層性）の効果と心理的距離の効果は同一ではない、という感覚が私の研究の出発点になっています。前者の効果がより強くあらわれる状況と後者の効果がより強くあらわれる状況を隔てる調整変数を明らかにすることによって、「解釈レベル」とは何なのかをより精緻に明らかにし、人が意識的に自己理解や他者理解の方法を調整しコントロールしようと試みる際に役立つ知見を提供したいと考えております。非常にマイクロな研究ではありましたが、本受賞を励みとし、真に「グループ・ダイナミクス」の動態に迫れるよう微力ながらも研究を進めていきたいと考えております。また、皆様と議論をさせていただけますと大変光栄です。

<ポスター発表部門>

🌸 白岩祐子（東京大学大学院人文社会系研究科）



この度はこのように名誉ある賞を頂き、とても光栄に存じます。審査して下さった先生方、貴重なご指摘をくださった先生方に、心より御礼申し上げます。

本発表は、犯罪被害者（ご遺族）に対する社会的認知を主題とするものです。被害者は、「加害者に強い怒りや恨みを抱いている」というイメージを付与される一方で、しばしば、「加害者をゆるし、事件のことを忘れる」よう周囲の人々から期待・要請される存在でもあります。本研究では、後者の「ゆるしの要請」の規定因として、「他人をゆるすことができれば自分自身が楽になれる」という、「ゆるしの救済効果」に対する個人の信念に着目し、これを指標化・測定しました。その結果、「加害者を絶対にゆるさない」と明言する遺族は、

「加害者をゆるす」と述べている遺族に比べ、ゆるしの救済効果信念の強さに関わらず多くの共感を寄せられる反面、この信念が強い人からの支援は、得られにくいということが示されました。

発表会場では、たくさんの研究者の方とお話しする機会を得、結果の解釈、課題や研究の意義について、多くの貴重なご指摘を頂くことができました。端緒についたばかりのまだ粗削りな研究を、このように評価していただいたことは大きな励みになりますと同時に、「いただいたご指摘に応答していかなければ」と背筋が伸びる思いでもあります。

最後になりますが、いつも研究を物心両面からサポートして下さる唐沢かおり先生、ならびに面倒をみてくださる研究室の先輩・同僚（大高瑞郁さん・橋本剛明くん・渡辺匠くんを始めとするみなさん）に、この場を借りて感謝申し上げます。

★三隅賞★

選考委員長 高井次郎（名古屋大学）

アジア社会心理学会第10回大会で、三隅賞の受賞者が発表されました。今回は2011年、2012年に刊行された Asian Journal of Social Psychology Vol.14, Vol.15 から各年につき以下の1論文が選ばれています。各先生方おめでとうございます。

Vol. 14

Nobuhiko Goto and Minoru Karasawa

Identification with a wrongful subgroup and the feeling of collective guilt.(Issue4, p.225-235.)

Vol. 15

Toshio Yamagishi, Hirofumi Hashimoto, Karen S. Cook, Toko Kiyonari, Mizuho Shinada, Nobuhiro Mifune, Keigo Inukai, Haruto Takagishi, Yutaka Horita and Yang Li

Modesty in self-presentation: A comparison between the USA and Japan. (Issue1, p.60-68.)

★海外(AASP)発表支援参加報告★

2013 年度のアジア社会心理学会発表支援制度に基づいて渡航費補助の得られた 3 名の先生方にアジア社会心理学会第 10 回大会の体験記を執筆いただきました。

⊗ **山田順子（北海道大学大学院 文学研究科）**

このたびは、2013 年 8 月 21 日から 24 日にかけて、インドネシア・ジョグジャカルタで開催されました第 10 回アジア社会心理学会への参加に際し、日本グループ・ダイナミクス学会より旅費支援を賜りましたことを、御礼申し上げます。今回、私は対人関係において、パートナーの獲得に伴う他者との競争が、対人関係形成戦略に及ぼす影響について発表させて頂きました。英語での口頭発表は初めての経験で、オーディエンスにどれほど興味を持ってもらえるのか、拙い英語で質疑応答にしっかり対応できるかなど、出発から発表の直前までは緊張の連続でした。実際の発表では、オーディエンスから笑いが溢れるなど興味深く聞いてもらえたようで、発表後にも今後検討すべき提案を頂くことが出来ました。特にチェアの方に興味を持って頂き、質問時間を延長して下さいました。また、発表後に廊下で出会った際にもコメントを頂き、初の口頭発表としては、想像したよりも良い成果を得られました。自分自身の発表や、口頭発表やポスター発表での議論を踏まえて感じたことは、母語以外での議論の難しさです。自分自身の語彙不足もあり、頭の中で描く回答を十分に相手に伝えることが出来ず、歯がゆい思いをすることが何度もありました。また、自分自身の研究を精緻にまとめあげることの重要性も再確認できました。日本語では、多少言葉が少なくても相手に通じることが多く、説明を省いてしまうこともありましたが、今回は全くそれが通用しませんでした。これらの改善すべき点を再確認できたことも、一つ大きな成果でした。

今回は、インドネシアで開催された学会であることと、土着心理学がメインテーマであることから、インドネシアの現状を詳細に記述した研究が多かったように思いました。個人を取り囲む環境と、その環境に対する適応という観点から対人関係形成戦略を理解しようとする上で、異なる文化における対人関係の状況や様相を理解する手がかりを得られたことは非常に有意義でした。また、私自身はアジアへの渡航が初めてだったため、風土や慣習に触れる機会を得られたことも良い経験となりました。服装や店舗、道路の様子なども欧米や日本とは大きく異なり、特に道を埋め尽くすようにバイクが走る様子は衝撃的でした。最後になりますが、このような貴重な経験と有意義な体験の機会を与えて下さいま

した、日本グループ・ダイナミックス学会に深く感謝申し上げます。今後の、日本グループ・ダイナミックス学会ならびにアジア社会心理学会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

⊗ 河合直樹（京都大学大学院 人間・環境学研究科）



私は現在、「東日本大震災の被災地にて『書道教室』を開催する」という復興支援・アクションリサーチに取り組んでいます。この活動が「アジア社会心理学」からどのように評価されるのか知りたいという衝動から、このたび、アジア社会心理学会発表支援制度による補助をいただいて AASP2013 に参加しました。

成田を発ってまずジャカルタ空港に着くと、京都の土産物店に漂うお香にも似た、強烈な香りに包まれます。この香りは、次のジョグジャカルタ空港にとど

まらず、街中のお店やホテルの部屋の中など、多くの場所で遭遇しました。国や都市ごとに特有の香りがあるのだとすれば、これこそがまさしくインドネシアの香りなのでしょう。海外渡航が初めてだった私は、その独特な空気に吞まれてしまい、興奮と不安を抱えて大会初日を迎えました。

ところが、大会を通して開かれる発表セッションの何と多彩なこと！不安や緊張など感じている暇もないくらい、多岐にわたる研究分野の発表がなされていました。たとえば「Communication」のセッションでは、「コメディアンと人種差別との関係」について軽妙なジョークを交えながら華麗に語りとおす、アフロヘアのマレーシア人学生に魅了されました。そして、特に印象的だったのが「Sexual Behavior」のセッションです。インドネシアでは、公の場で性の話題を口にするには日本以上にタブーとされているようで、最近の一部の研究者がその障壁を乗り越えようと動き出しています。セッション後、ある男性教授とは「日本とインドネシアの比較研究をしたいね」という話で大いに盛り上がりました。大会全体がこのようにアットホームな雰囲気ですから、冒頭で述べたようなカタクルシイ参加目的はいつの間にか氷解し、気づけば純粋に大会を楽しんでおりました。私の発表したポスターセッションは2時間30分（！）におよぶ長丁場でしたが、質問者のひよんなひとことから始めた書道パフォーマンスが次々と人を呼び、2時間半では足りないほど大変多くの方々に関心をもっていただくことができました。大会を終えた後の達成感と充実感は、いくら言葉を重ねても語りつくせません。

渡航直後はなかなか馴染めなかった「あの」香りも、帰国した今となっては郷愁と愛着を感じています。未だお土産品からかすかに漂う芳香に思いを寄せつつ、2年後の AASP2015

を楽しみに待ちたいと思います。末筆になりますが、このようなかけがえのない機会を与えてくださった日本グループ・ダイナミクス学会役員の先生方に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

❁ 古村健太郎（筑波大学大学院 人間科学総合研究科）

このたび、日本グループ・ダイナミクス学会からのアジア社会心理学会発表支援制度による補助をいただき、アジア社会心理学会第10回大会（AASP2013）に参加いたしました。



屋外でのポスター会場

開催地であるインドネシアのジョグジャカルタは人口の約4割が学生で占められる学生の街だそうです。実際、空港から宿泊先である大学構内のホテルに向かうまでは原付き自転車で移動する学生で溢れており、学生街の活発さを感じることができました。また、ホテルの周りでは大学生と思われる男女グループが輪を作って地べたに座り、夜遅くまで語り合っている姿を多く目にしました。その近くを通った際に、彼らの視線がこちらに集中し、少々怖い思いをいた

しました。日本でもインドネシアでも大学生の生活に大差はなく、似たような感じなのかもしれません。

今回の学会では、快晴の下、屋外の会場で行われたポスターセッションにて、“The associations between approach-avoidance commitment, relationship satisfaction, and depression”というタイトルで発表を行いました。本研究では、恋愛関係に対するコミットメントを接近コミットメントと回避コミットメントに分類し、それらが対人葛藤時の方略選択や個人の精神的健康に与える影響を検討いたしました。恋愛についての研究は海外でも関心が高いようで、多くの大学院生がポスターに関心を示してくれました。しかし、英語に対する自信のなさゆえ、こちらから積極的にコミュニケーションを取ることができず、悔しさが残る発表となってしまいました。また、今回の大会では、インドネシアのテロリズムについてのシンポジウムが印象に残りました。幸運なことに日本ではテロリズムは身近な危険ではありません。しかし、インドネシアではそれが身近な問題であり、解決すべき問題なのだと改めて実感しました。自分の生活する環境が恵まれていることと合わせ、心理学はこのような問題の解決にどのくらい貢献することができるのかについて、深く考えさせられました。



invite speech の前に行われた
眠気覚まし体操

最後になりましたが、学会参加と学会発表をご支援くださいました日本グループ・ダイナミックス学会に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

★機関誌編集委員会からのお知らせ★

「実験社会心理学研究」のJ-Stageでの早期公開のお知らせ

機関誌編集担当常任理事 沼崎 誠（首都大学東京）

掲載決定がなされた論文を、できるだけ早く公開するために、J-Stageにおいて早期公開制度を利用することになりました。最新刊号に掲載された論文および早期公開中の論文は下記のサイトでご覧いただくことができます。それ以外の論文は、「最新刊号」のサイトから巻号を指定していただければご覧いただくことができます。

最新刊号 <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jiesp/-char/ja/>

早期公開 https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jiesp/advpub/0/_contents/-char/ja/

当分の間は、冊子体の編集時に掲載決定がなされている論文を、早期公開するという方針を進めて参ります、他の心理学関連学会の機関誌よりも掲載決定から公開までの時間が短くなると思いますので、「実験社会心理学研究」へ積極的なご投稿をお待ちしています。

★事務局からのお知らせとお願い★

【研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について】

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などありませんので、奮ってご応募ください。詳細は学会ホームページをご参照下さい。

(学会 HP: http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html)

【実験社会心理学研究 掲載予定論文(2013年10月1日現在)】

■ 2013年度 53巻2号 (2月中 発送予定)

原著論文

村山 綾・三浦麻子 (早期公開済み)

集団討議における葛藤と主観的パフォーマンス—マルチレベル分析による検討—

黒川雅幸 (早期公開済み)

もったいない感情の心的機能に関する研究

阿形亜子・釘原直樹 (早期公開済み)

向社会的行動における競争的利他主義の検討

野波 寛・蘇米雅・ハス額尔敦・坂本 剛 (早期公開済み)

コモンズとしての牧草地の管理権をめぐる正当性の相互承認構造：内モンゴル自治区における牧民・行政職員・都市住民の制度的基盤と認知的基盤

資料論文

矢崎裕美子・斎藤和志 (早期公開済み)

就職活動中の情報探索行動および入社前研修が内定獲得後の就職不安低減に及ぼす効果

山中咲耶・吉田俊和 (早期公開済み)

評価者の面前におけるパフォーマンスの抑制メカニズム—認知的側面と感情体験に着目して—

■ 2014年度 54巻1号 (8月中 発送予定)

展望論文

飛田操

成員のあいだの等質性・異質性と集団による問題解決パフォーマンス

原著論文

平島太郎・土屋耕治・元吉忠寛・吉田俊和"

態度の両価性が行動意図の形成に及ぼす影響—子宮頸がん検診の受診を対象とした検討—

日高友郎・水月昭道・サトウタツヤ

サイエンスカフェにおけるファシリテーターの集団維持機能：市民—科学者間の会話を支える要因に注目して

☆早期公開済み論文は下記サイトで閲覧できます。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/advpub/0/_contents/-char/ja/

【実験社会心理学研究の特集テーマ募集】

実験社会心理学研究では、グループ・ダイナミクスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書(A4版1-2枚程度)を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細は、学会ホームページ(<http://www.groupdynamics.gr.jp/feature.html>)をご参照ください。

なお、実験社会心理学研究は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

【次年度大会について】

2014年度大会は、安藤清志委員長のもと、東洋大学にて9月6日（土）、7日（日）の予定で開催されます。多くの会員の方の参加をお待ちしております。

★グルダイ学会関係連絡先★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷（株）学会フォーラム内
電話：075-415-3661
FAX：075-415-3662
E-mail：jgda@nacoss.com

◆学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57
昭和女子大学 人間社会学部心理学科 藤島喜嗣研究室
電話：03-3411-2945
E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る中西印刷（株）営業部編集校正課内
電話：075-441-3155
FAX：075-417-2050
E-mail：jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

編集委員長

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京人文科学研究科 沼崎誠

E-mail : numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、書評、公募情報など】

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学社会学部心理学専攻 北村英哉研究室

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

【編集後記】

今年のグルダイ大会@北星学園大学では、北海道の爽やかな気候のなか、多くの興味深い研究に触れることができました。また、懇親会では、北海道の美味しいお酒に舌鼓を打ち、毎晩陽気に飲み歩いていたように思います…。本業の研究ももちろん大事ですが、お酒を介した研究者間のコミュニケーションも学会の重要な機会の一つだと改めて思いました。…決して毎晩飲み歩いていたことを正当化している訳ではありません汗（編集子）